文化構想学科

アジア文化コース

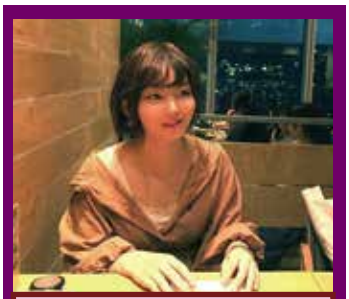
アジア文化コースとは

このコースでは、「地域」「共生」「比較」という3つのコンセプトを掲げて、アジアの文化的ダイナミズムをテーマとしています。日本、大阪をふくむ「アジア」とは、昔から文化、言語、宗教などにおいて多様性に富んだ地域です。そして現在のグローバルな文化交流によって、多種多様な課題と現状に対する理解が求められています。アジアに対する深い理解と共感、現代の文化状況への鋭い感性、文化にアプローチするための専門的な知識などをもとにしながら、それぞれの地域や社会の特性に応じた文化の活用を考えていきます。アジアについてなにも知らなくても、自分の生きている社会と歴史に好奇心を感じている学生、未来について考えたい学生に、オススメです！

教授 松浦（まつうら） 恆雄（つねお） 先生

先生の研究

主に20世紀の中華文化圏の文化を研究しています。中華文化圏とは、大陸・台湾・香港・東南アジアなどの漢族文化が支配的な地域を指します。私がこれまでやってきた研究を一言でいうと、20世紀に入り近代化を余儀なくされた中華圏文化の変容を、小説・詩・演劇などの具体的なテキスト（或は上演）に即して明らかにすることです。これらの作業は、地域社会の文化的変容とも密接に関わらせて進める必要があります。ここ数年は、一九三〇～四〇年代の上海のラジオ放送と演劇文化の関係の分析に力を注いできました。現在は、マレーシアの華語文学の翻訳と中国現代詩に詠みこまれた蝶のイメージの変遷から中国現代詩の特徴を分析しているところです。



２回生 川内（かわうち） なな さん

学生にインタビュー

○コースに入ったきっかけ

私はもともと欧米の文化に興味があり、アジア全体どころか隣国の韓国・中国の文化にさえ関心があまりありませんでしたが、高校時代にKPOPに夢中になり、その関心が一転しました。欧米からも多くの影響を受けながら独自の発展を遂げてきたアジアの国々のことをもっと知りたいと思い、アジア文化コースを志望しました。

○自身の興味

アジアという地域は本当に広大で、それぞれの社会に独自の文化が根付いています。私は東・東南アジア、特に韓国とシンガポールに興味があるのですが、一国の言語・宗教・文化をただ見ていくだけではなくて、異なる文化圏との比較や過去との比較をすることで興味がもっと深まるのではないかと思います。

○楽しみにしている授業について

日本、中国、マレーシアなど様々な地域を研究されている先生方がいらっしゃるので、授業を通して自分の関心があまりなかったような文化に触れることも多いと思います。知らない文化に触れることができる授業ばかりなので、旅行に行く時のようなわくわく感というか、とにかく知的好奇心を掻き立てられます。

卒論テーマ例

- 日中韓の近現代演劇のなかにみる女優の位置付け
- 東南アジアにおける教育と宗教
- 大阪をテーマにした戯曲（演劇シナリオ）にみる多文化共生

教員紹介

松浦 恆雄 教授 Tsuneo Matsuura
19 世紀末以降の中国演劇、および近現代文学。
共編『中華文藝の饗宴』（『野草』第百号）研文出版、2018 年。

多和田 裕司 教授 Hiroshi Tawada
文化人類学、東南アジア地域研究、現代社会と文化
共編著『イスラーム社会における世俗化、世俗主義、政教関係』（上智大学アジア文化研究所、2013）

堀 まどか 准教授 Madoka Hori
国際日本研究。比較文化。境界者の人生や作品から社会と歴史をさぐる。
主著『「二重国籍」詩人 野口米次郎』（名古屋大学出版社、2012）

アジア文化コース オススメ入門書

『市大文学部アジア文化学のすべて』
【編著者】市大文学部アジア文化学の教員・学生一同
【紹介】

アジア文化学というのは、市大文学部の特産品です。すでに一定の学問体系が具わり、研究の蓄積を持つ学問分野と同じ様には行きません。よって、編集子が求めるような、これ一冊でアジア文化学はOK、といった入門書はありません。アジア文化学の入門書とは、アジア文化学教室の活動そのものと言うほかありません。教員三者三様の研究とそのスタイル、皆さんの個性や学習、授業や課外活動での交流などを通して、徐々に作り上げられてゆくのが実体としてのアジア文化学という学問です。学問は、それに従事する人（教員・学生）のスタイルと不可分です。皆さんと一緒に、アジア文化学の入門書を編んでゆきましょう。というわけで、上記の書物は、目下、鋭意編集中。でもちょっとどんな本か覗いてみたいという人がいましたら、遠慮なく三人の教員のドアをノックしてみてください。その時からあなたも編著者の一人です。

10 月末～11 月初めに行われる学園祭が「銀杏祭」です。様々なイベントが行われ、大いに盛り上がります！